
"え"から始まる物語 改稿

ビビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

”え”から始まる物語 改稿

【Nコード】

N0920J

【作者名】

ビビ

【あらすじ】

【魔王殺し】を行い、冒険者の中での最高峰であるSランクを持つカシムは悲しいほどにモテなかった。努力しても、努力しても、報われることなく、一人静かに過ごしていた。祭りの夜、ざわめく街頭には仲睦まじい男女があり、それを見て静かに涙を流す。そして、彼は唐突に決意する。そうだ、女風呂を覗こうと　これは非モテの少年カシムが巻き起こす騒動の物語。

序章・魔王殺しの真相（前書き）

とある公募に予定の作品です。

かなり際どくアホらしい内容です。

こうすればもっと面白くなるよ。ここは矛盾があるんじゃないかな。などの指摘をもらえると嬉しいです。

単純に面白くない、面白い、などの一言でもよろしいので感想頂けると喜びます。

序章・魔王殺しの真相

そこを表現するならば、まさに“不吉”という言葉しかないだろう。

堅牢な石造りの回廊は薄暗く、松明も今は燈されていない。差し込む光はなく、耳障りな雷鳴が轟いたときのみ照らされる。

雷光に映し出された回廊は凄惨なものだった。もとは一切の汚れなきものであったが、今は夥しい血痕に塗れており、鼻につく錆びた鉄の臭いで充満している。

臭いの元である血痕を撒き散らしたのは魔獣。切り裂かれ、叩き潰され、蹂躪された。本来なら人々から恐れられるべき強大な魔獣たちの死骸。

まるで恐怖そのものを垣間見たような凄絶な死に顔。助けてくれ、逃がしてくれ、と懇願したのだろうか。血に平伏したまま首だけを斬り落とされたモノもいる。逃げ出したのかだろうか、背中を斬られたモノもいる。狂気に彩られ、恐怖に立ち向かったのか、身体を真っ二つに斬られたモノもいる。

全ての死骸に共通することは、一撃で命を奪われているということ。

これはどういうことか、進むにつれ濃度の増す死の気配は誰が撒き散らしたのか。

回廊の終着点には大きな扉があった。

絶対神カイジネルが十字架に磔にされて、胸元には魔槍ザファイエルが突き刺さっている絵画が描かれた大きな扉。

その扉は半ばから破壊され、人が通れる程度の穴が開かれている。分厚いその扉は世界で三番目に硬いといわれるミスリルといわれる代物。そう簡単に破壊できるものではないはずなのだが、見事と言っているほどに突破されている。

果たして、その先に見える光景はどういうことか。

中には玉座がある。ただそれだけの部屋だ。

玉座に住まうは異形。まず眼を引くのは人では有り得ぬ灰色の肌。腰ほどまで伸びた銀髪の間から伸びる擦れた一本の角。身体は太く長く、その身を覆う鎧は全く光を映さない漆黒の鎧。

異形の名はバルギルス。黒帝バルギルス。人々から魔王と恐れられる魔獣の王。そのはずなのだが　人々に語られる彼は灼熱色の魔眼を持つ、と言われているその眼は堅く閉じられ、小刻みに震えていた。

彼は恐怖していた。目の前にいるたった一人の人間に　少年に恐怖していた。

「貴様　貴様は何故ここまで非道なことができるのだッ！」

彼は肺の中に残存していた空気を全て吐き出すかのように叫んだ。そうなのだ。おかしいのだ。こんなことがあつてはならないのだ。魔王である自分こそが手段を選ばず人々を殲滅する権利を持つ。

蹂躪する権利を持つ。

魔王である自分に立ち向かってくる勇者を手段を選ばず粉碎し、撃退する義務を負う。

今までの勇者は　強くはあつたが、今いる場所である魔王城の正門から堂々と進入し、幾重にも張り巡らされた罫を踏破し、大量に設置された魔王の従僕である魔獣を撃破し、疲労した体で魔王である自分に挑んできた。

時代が変わっても、それはまるで種々の規則であるかのように遵守されていた。

それなのに、何だ。こいつはどういうことだ。

何故

「何故、貴様はここまで残酷になれる。我が城の周囲に魔獣殲滅用の結界を隠密に、綿密に描き、一気に浄化させて弱き魔獣を殲滅し、

強き魔獣を弱体化させ、残っている罫のあるフロアは全て爆破し、それら全てをあっさりと突破する。こんなことがあってよいとも言うのか。それでも貴様は勇者と名乗れるのか?!」

彼は心から悲嘆し、叫んだ。

それでも貴様は正義か、と。

しかし、それは意味なき事でもあった。

彼 黒帝バルギルスと相對している少年は年齢のわりには長身の少年は、皮の胸当てと皮のパンツ、皮のブーツという軽装備をしていた。その中で一際目立つのは背に担がれた大振りの剣。

剣というのも馬鹿らしいほどの超大なその剣は少年の身の丈を軽く超え、常人では持つことすらできないほどの重量があるが、そんなことを全く感じさせない。歴戦の猛者の如き雰囲気醸し出しすらしている。

切れ長の瞳は温度を感じさせないような鋭利な眼光をしているが、今だけは柔らかい表情に見える。バルギルスを見て困ったように笑っているのだ。何の手入れもされていない散切り頭の黒髪を人差し指でくるくると巻きながら 笑っているのだ。酷く、困惑したように。

「何を勘違いしてるんだ。お前は？」

少年が発した言葉は小さなものであるが、バルギルスにとってはとてつもなく威圧感を感じる声だった。

まるで頭上から何か大きなものが降ってきたと思えるようなそれほどまでの圧倒的な力。

握手をただけで力の差がわかる というが、これはそのようなレベルではない。器が違う、と思った。跪いて命乞いをしたいと思った。

感じたのだ。自分ではコイツに勝てないと。

そのようにバルギルスが絶望しているとは露知らず、少年は続ける。

「俺は勇者じゃねえ。魔王殺しなんていう大それたことを、勇者みたくに慈善事業としてやれるかよ。俺は戦士だ。冒険者だ。名誉と金のためにやってる。今回はアレだ。名誉のためだな」

ハハハ、と笑うかのように少年は言う。

魔王殺しを大それたこと、とは言っているが、その言葉からは全く緊張感が感じられない。ちよつと飯食ってくる、と言って外に出かけるような、そんな気軽な言葉のように感じられる。

それもそのはずだ。

「お前さ。あらゆる美女を取り囲んでるんだってな？それを寄越してもらうために俺は来た。俺はその女たちを囲ってハーレムを作る。未経験の俺を優しく包み込んでくれる理想的な女性たちを囲って、俺は一足先に　魔王城決壊のために作り上げた結界をコントロールしているデルブライトより先に　大人への階段を登る！」

これだけの理由。

少年はたったこれだけの理由のために魔王殺しを決意したのだ。

命を懸けて、魔王を殺すことを覚悟したのだ。

この言葉に魔王であるバルギルスは憤慨する。そんなことのために　我が身を滅ぼすというのか？！と。しかし、それは無駄なことだろう。少年は本気なのだから。

「そんなこと　だと？テメエに何がわかるって言うんだよ！同い年の奴らが彼女を作る。そして、それを俺に自慢する。とても幸せそうな顔で、惚気た話を語るんだ！お前にわかるか？！俺の惨めさが、情けなさが、遣る瀬無さが！お前にわかるって言うのかよ！」

バルギルスの言葉に感応するように、そう　少年は怒り返した。呼応するかのように少年の立つ石造りの床は罅割れていき、競り上がり、暴発する。【闘気】^{オーラ}の発散だけで周囲を破壊してしまう。それを見てバルギルスは身が竦む思いをした。自分にはそんなことはできない、と。

「まあ、お喋りはこんなもんでいいだろ。そもそも、お前がいけないんだぜ？ひっそりと人の目に触れないように、人に危害を加えないように生きてたら、こんなことにはならなかった。俺と合間見えることはなかった。だから、お前が悔いるべきは、自分の今までの行いと自分の非力さだ」

言われ、バルギルスは歯を噛み締める。
少なからず自分が悪いと思うこともある。

「確かに　確かに、とある神秘的な森に住まうエルフという耳長族の中でもスレンダー美人のラエリちゃんを攫いました。とある王国の第三王女であるとしてもなくグラマラスで危険なまでに童顔のアザリーちゃんを攫いもした。とある山奥で獣人族の中で狼の特色を強く持つとても活発で可愛げのあるくせに貞淑な素振りを見せるフェルムちゃんを攫いもした。

けれども、それらは全て同意の上のことなのだ！」

切羽詰った表情でバルギルスは言う。

中々よき逢瀬であった、と満足げな吐息を時折交えながらも切迫した表情でバルギルスは言う。

その様は、少年に思い出させた。惚気話をする友人のことを思い出させた。要するに、少年をとつともなくム力つかせた。

歯と歯が擦れる不愉快な音を少年は口内から発しながら、漆黒の

瞳を爛々と輝かせ、濁らせながらバルギルスを睨みつけ、背に担いだ名も無き鉄製の太剣を構える。

その姿は 嫉妬に狂う哀れな男でしかない。

「俺の名はカシム。ただのカシム。心に刻め。お前を殺す男の名前だ」

ギチギチギチギチ カシムの身体は力を溜め込み続ける。

言葉を発しつつも、一切の油断無く、微塵んの隙もなくバルギルスの動きを注視する。

「フン、せめてもの礼儀だな。いいだろう。我が名はバルギルス」
ドゥイスラフェル。カイジネル神の手によって戯れに作られた【魔王兼遊び人】だ」

バルギルスもそうだった。

両手から轟々と立ち上る漆黒の炎を浮かばせながら、何時でも臨戦できるようにと警戒しながら名乗った。

先ほどまでの恐怖は既に捨て去り、叶わなくとも一矢報いるという決意をしていた。

「せめて、最後くらい美しい結末を与えてやる」

「せめて、貴様を道連れにしてやる」

両者は激突する。

バルギルスの手を持つ炎は【デッドエンド魔王炎】という特殊な炎。

純粹な魔力のみで作られた炎は尽きることなく、媒体が消え去るまで燃え続ける地獄の業火。

喰らえば人間などひとたまりもなく死に果てる。

その炎をバルギルスは周囲に展開し、弾丸と化してカシムを襲う。

「お前の技も、魔法も、全部調べ尽くしている。お前は既に丸裸なんだよ」

カシムの剣から浮かぶのは紺青の盾の形をした刻印。全ての炎を無効化にする祝福の魔法【消火】クリアシール。

驚きの声を上げる間もなく、あっさりと【魔王炎】デッドエンズは消滅し、バルギルスはカシムに詰め寄せられ、首筋に剣を突き立てられていた。一瞬の静寂。

「殺せ」

せめて魔王らしく死のう、とバルギルスは諦観して呟いた。

ゆっくりと目を閉じて、迫り来る死を受け入れようと思考する。

受け入れることができるのかどうか、死のことを考えているとバルギルスの脳裏には数々の幸せだった思い出が蘇る。

ラエリちゃんに膝枕してもらったこと、アザリーちゃんの胸を鷲掴みにしようとして回避されて殴られたこと、必死にアプローチをしても頬を朱に染めてイヤよイヤよをするフェルムちゃんのこと。

それらのことを思い出し、来るべき死を待ったが

「？」

しかし、一向に死は来ない。

首筋には確かに冷たい 死を与えるための大剣の当たる感触がある。しかし、先ほどまでは力強く固定されていたその剣は今ほ小刻みに震えており、持ち主の精神状態が安定していないことを強く物語っている。

どういうことだ、とバルギルスは閉じた瞳を開いてみた。

開かれた視線の先には不思議な光景が広がっている。さすがのバルギルスも生まれて五百年ほど経つが、ここまで奇妙な経験をしたことがない。

「ち、ちくしょう　ずるいじゃねえかつ！」

圧倒的優位な立場にいるはずのカシムはそう漏らす。

何故なら、カシムは今動けないのだ。女三人に抱きつかれているから。足、腰、腕と三つの箇所を拘束されていたのだから。

力で振り解くのもカシムにとっては容易いが、涙ながらに「殺さないでくださいと訴えてくる女たちを振り切ることはカシムにはできない。

「お願いです。やめてください。その方は私の恩人なのですっ！部族の中では仲間はずれだった私を拾ってくれたたった一人の男性なのです！」

耳長族のラエリは言った。

「やめてよっ！バルちゃんは王位継承争いに巻き込まれていた私を助けてくれたんだッ！殺したら絶対に　絶対に許さないからなッ！」

王女であるアザリーは言った。

「やめろっ！未だバルギルスとの間には子を為しておらぬっ！今死なれては困るのだッ！私はバルギルス以外との男と子を為すつもりはないッ！」

獣人族であるフェルムは言った。

「　　チッ」

首筋に突きつけられた剣をカシムは引いて、女たちの手を振り解いて背に剣を担ぐ。

本来なら勝っていたはずのカシムは、酷く悔しい思いを味わっていた。

「ちくしょう。くそつたれ。死んでしまえ、って言葉をプレゼントしてやる。とりあえずだ。お前はここを去れ。そうすれば俺がお前を殺したってことにしてやるよ」

ハア、とカシムはため息を吐く。

こんなはずじゃなかったんだけどなあ、格好よく女の子を救つてモテモテのはずだったんだけどなあ、とぼやきながら、言葉を紡ぐ。

「あと、この結界を解けば魔獣たちも生き返る。この結界は生命力を奪い取るものだから、貯蓄された生命力を還元すれば生き返る」

デルブライトに何と言われるだろうか、と想像しただけでカシムは泣きそうになるが、さすがに女を泣かせるわけにはいかない。というよりも既に泣き顔なのだ。女達は。

卑怯だ、とカシムは心の底から思う。免疫のない自分では抗えるはずもない、と悔しげに思う。

「あー、もう、チクショウツ！今度モテる方法教えるよなっ！それでトントンだ。そうだろ?!」

「あ、ああ」

現実とは小説よりも奇なり。

後に英雄と記されるカシムは実際のところ魔王など殺しておらず、魔王殺しと言われている彼はただの戦士であった。

誌面の上では彼は英雄となつたし、カシムの強さは誰もが認めるところであつた。

しかし、歴史の中で綴られることなき真実がある。

カシムのモテなさはある種の伝説になるものだった。それは見事に隠蔽された。

カシムの性欲はある種の伝説になるものだった。それは見事に抹消された。

では、語るとしようか。

魔王の話は序章に過ぎず、戦士カシムは己が本能のために命を燃やす。

人は彼を馬鹿と言う。人は彼を愚かと誇る。

だが、見る。これがカシムだ。これこそが男の生き様だ。

己が道を妥協せず、ただただ前へと進み行く。

「あゝ、どうやったらモテるのかなあ」

今一度言おう。

魔王の一件は序章に過ぎないのだと。

1 - 1 はいはい、惚れる惚れる

1 .

【名誉なき栄光】は冒険者ギルドの中でも中堅どころだ。

弱小は建物すらなく、屋敷を立てて、ようやく中堅と認められる。

【名誉なき栄光】は屋敷というには少しばかり小さな木造の家である。宿屋兼飲み屋のような造りで、まさに宿屋と飲み屋どちらもこなしていたりする。

一階は丸テーブルが複数置かれており、男たちがいっぱい座って酒を飲み交わしている。

今日の冒険はどうだった、今日潜った迷宮は恐ろしかった、こんな魔獣と戦った、生きててよかったな、などと野太い声で語り合っている。

酒臭い吐息をばらまく場所であるが、一か所だけ浮いているところがある。奥にあるカウンターだ。そこはギルドマスターが居座る場所である。

「そう。それは大変だったんだね」

カウンターからは可愛らしい声で同情の念を表す声が聞こえてくる。ギルドマスターであるダークエルフのミオだった。

タートルネックの膝丈ほどまである汚れなき羊毛で編まれたセーターだけを着ていて、スカートもズボンも履いてはおらず、随分と扇情的なはずなのだが、彼女　ミオはとても未発達な体型をしており、追記するとすれば身長も140cm未満なので子供っぽさが際立っている。

金糸のような髪は肩ほどまで伸ばされて、前髪は花の飾りがついたカチューシャによって上げられており、美しい曲線を描くおでこ

が見事に見えている。が、特に目を引くのが大きく開かれた垂れ気味の目だ。まるで海のように深い紺青の瞳は全てを飲み込むような、全てを許してくれそうな色。その瞳を見ると甘えたくなるようなそんな色だ。

その瞳に甘えるかのように、ミオの立つカウンターの前でだらしなく上半身を突っ伏している少年は黒のシャツにスキニーという単純極まりない色気の欠片もない服装をしている。カシムだ。

「魔王を倒したら世界は変わるってお前は言ったよな。聞かせてくれ。世界はどう変わったって言うんだ？」

震える声で、今にも泣き出しそうな様子でカシムはミオに問う。魔王を倒しても変わらない世界にカシムは絶望していて、答えを求めてミオに問う。

「平和になったんじゃないかな？魔王が死んで、魔王の傀儡も消え去って、とても治安が良くなったと聞くよ。君は間違ったことなんてしていない。胸を張ってもいいことだと僕は思うよ。」

確かにその通りだ、とカシムは思う。のろのろと顔を上げ、少しばかり赤く腫れた目でミオを見る。

「そうか。なら、俺は善い事をしたんだよな？」

自信なさげに言うカシムの言葉。

常ならば自信に溢れているはずのカシムが、おかしいくらいに弱気になっていることにミオは疑問を覚える。無駄に熱いはずのカシムがここまで弱音を見せるなんて珍しく、ミオの心に突き刺さる。守ってあげなきゃ、と考えてしまう。

だから、肯定してあげようと思った。

正しいことをしたんだよ、と教えてあげたいと考えた。

「うん、誇ってもいいと 僕は思うよ」

「そうか」

少しばかりの静寂。

その静寂を打ち消すかのように背後から野太い男たちの歌声。
雰囲気ぶち壊すんじゃないやねえよカスが！と内心ミオは思う。

「じゃあさ。ミオに聞きたいことがあるんだ……」

「どうしたの？」

言いにくそうに、もじもじとカシムは似合わないのに身体を擦る。
可愛い、とミオは思ってしまった。少し頬を赤らめながら言い辛
そうにしているカシムのことを可愛いと思ってしまったのだ。

が、この考えはカシムの一言によって一気に消え去ることになる。

「お前は俺に恋したか？」

唐突な言葉のおかげでミオは混乱する。

は？というのが正直な感想だ。

潤んだ瞳で見つめてくるカシムは本気のようにだ、とミオは察する
が、果たして意味がわからず、ミオは尖った自分の耳をしきりに揉
む 慌てたときにだけしてしまう自覚のない癖だ。

「俺は女にアピールするために頑張った。そのためだけに魔王の討
伐に向かった。そのために懸けた時間は膨大で、三か月ほどの期
間をかけて対策を練りに練って、先日打倒した。だが、結果はどう
だ？」

興奮気味にカシムは語る。

手元にあつた飲みかけの麦酒を一気に呷り、酒に酔ったのか、少しばかり呂律の回らない舌先で言葉を紡ぐ。

「俺はモテない　　ッ！　何故だ？　何故、俺は彼女ができない？　そこらを歩く男どもは女を連れて歩いている。幸せそうに腕を組んで　歩いているッ！　あいつらは確かに努力をしたのかもしれない。だけど、あいつらは命がけで異性にアピールしたのか？！　俺よりも努力したのか？！」

「　君ほど努力した人はいないと思うよ」

「ならば、なんで俺に恋しない？　なんで俺を愛さない？　俺の努力は　　なんで俺は報われない　　ッ！」

少しばかりときめいた先程までの自分をミオは罵る。

僅かなりともカシムに同情しようとした自分は馬鹿だ、と心から思う。なんとという矮小で凡俗な悩み。たったこれだけのために滅ぼされた魔王は如何な気持ちか、とやるせない気分にする。

昔からそうなのだ。

ミオから見てカシムは普通に格好良い。黒は不吉な色とされているが、鋭い視線を宿す赤銅色の瞳とよく合い、心を揺さぶる。そのような目で見つめられると心臓が跳ね上がる。

180cmを超える身長にあわせ、鍛え抜かれた強靱な細身の肉体。割れた腹筋は色気漂い、盛り上がる二の腕は逞しく、くつきりと浮いて見える鎖骨など大好物だ。

戦闘だつてとびきり強く、未だにカシムが負けたという話を聞いたことがないし、しかも、最強とされる魔王ですら倒してきた。女にモテモテでも仕方ないほどの素材なのである。

が、性格が残念だった。

とにかく下世話なことしか興味がなく、暇を見てはアダルティ―な本ばかりを読み耽っていることをミオは知っている。

カシムの醜態を思い返すたびにミオはため息が漏れる。こんな性格じゃなければなあ、と常々思う。もったいない、の一言だ。

その考えがバれてしまったのか、カシムは胡乱気な視線をミオに向けている。その視線は悠然と物語っている。なんだよ、何かあるなら言えよ、と。

ミオは更に深いため息を漏らしつつ、言っただけでやることにした。

「一か月喋らないでおいといて。断言してもいいよ。女の子が自然と君に寄ってくる」

そう、カシムは格好いいのだ。喋らなければ、黙っていれば、クールな外見が際立つし、外見のせいか喋らなくても許されるのだ。

ああ、とか、そうか、だけ言っていれば許されるはずなのだ。

そうすれば彼女などいくらでもできよう。

いつの間にもやらミオは耳を揉むのをやめていた。

「ミオは俺に惚れてくれるのか？」

「はいはい、惚れる惚れる。抱かれてあげるかもね」

「マジでツ?!」

興奮するカシムをおざなりに手を払うようにミオは話を打ち切った。

そうか、惚れてもらえるのか、などと呟くカシムのことなど無視だ。三秒も持つまい。

「アーツハハハ！ チェリーのカシムがモテたいとか言ってるぜえ？ 娼館にすら行けないチキンがほざいてるぜ？」

その声と同時に笑い声がギルドの中に充満する。

声を発したのはギルドメンバーの中で中堅の男だ。不細工な髭面

によく合う大きな男。盗賊崩れと言われれば信じてしまうような見てくれた。

また始まったよ、とミオは本日何度目かわからぬため息を吐くことになる。ギルドではよくあることなのだ。酔った勢いで喧嘩なんてことは。

「テメエ 何て言った？」

ぼそり、とカシムは言う。

その一言は背後の男たちを楽しませるだけということに気づかず、発する。

「聞こえなかったのかア？ じゃあもう一度言ってやる。娼館にすら行けないチキンでチエリーなお前に彼女ができるわけねーっつってんだよ！」

酔っ払いは彼我の実力差を考えず、最強の戦士の逆鱗を撫でる。

カシムは震える。怒りで震えている。青筋が立ちまくり、毛が逆立つ。頼むから店は壊さないでよ、と小さくミオはお願いするが、果たしてそれは聞こえているのか。

カシムはゆっくり立ち上がり、振り向いて背後にいた酔っ払いどもを睨みつける。娼館、娼館うつせえよ、とこぼす。

そして、胸一杯に空気を吸い込み 吼えた。

「初めては好きな女の子 俺を好きでいてくれる女の子とやるって決めてんだよお！」

だが、その獅子吼は下郎どもには届かず、店内にはギャハハと野太い笑い声がこだまするばかり。

笑い声に対してカシムは激昂する。何がおかしいのだ、と。俺の

何が間違っているのだ、と。

「お前らは俺の価値観を否定する気か?! 愛は金じゃ買えないだろうがっ! いいぜ、やってやる。お前ら全員ぶっ飛ばして、俺が正しいって証明してやるよお　ッ!」

言葉が通じないのなら、と袖を捲って臨戦態勢。男たちも複数が立ち上がり、立ち上がらなかつた男たちは「いいぞ、やれやれ」と煽るばかり。

「前から愛を金で買うテメエらのことは気に入らなかつたんだ。ぶっ潰してやる　こいやああああ!」

その声をとっかかりとして男たちはカシムに飛び掛かる。

とびかかっていった最初の男は腕を思いつきり振りかぶり、突進する勢いに体重を乗せた右フックを繰り出すが、沈み込むように踏み込んだカシムには当たらず、視界の外である懐の中からアッパーカットを顎にぶち込まれ　天を舞う。

「馬鹿ばっか　」

諦めるようにミオは呟く。

今日も男たちは元気だった。

1 - 2 そのほうが面白そうだろうか？

2 .

漆黒に塗りつぶされた空に輝くものがある。中天に浮かぶ赤い月。鮮血の如き朱色は宵闇を赤く染め、人々を狂わせるという。

狂わないよう、踏み外さないよう、魅了されないように人々は闇に向かつて松明を灯し、正気を保つ。

今宵は月に一度の満月の日。

満月の日は最も影響が強いという理由をつけ、人は寝ずに夜を過ごす。

「とは言うものの、月は毎日昇るし、降りるし、満ちるし、欠ける。そんなものに影響されるほど人は弱くないだろうし、そんなものに染められるほど人は柔軟じゃない」

最初は寝ないだけの日だったのだが、だんだんと人は寄り添うようになり、寄り添う場所には賢い商売人が現れて、こぞって人々は集うようになる。

これが【朱月祭】の原点だが、人々は既に覚えていない。

今となっては若者にデートの名目を与えるだけの意味なき行事と化している。

聖ブリュナーゲル城皆都市も同様に、今宵だけは無礼講。老若男女問わずに羽目を外している。この都市の観光名所となっている自由公園と言われる場所に人々は集い、飲めや踊れやの真つ最中。

その輪から外れて静かに酒を飲み交わす少年が二人いた。

少年たちは自由公園の中央部にあるベンチなどから程遠い場所にある、植えられた樹木との垣根で地べたに座り込みながら酒を飲む。カシムとその相棒であるデルブライトだ。

デルブライトは全体的に細身で、病的なまでに白い肌を隠すかのように昏いローブを羽織り、露出している肌は手と顔のみ。なのにも関わらず、妙な色気が漂う、見ただけで魅了されてしまうような不思議な少年だった。

彼はトレードマークである朱月と同じ色をした前髪の際間から、硬質の意志を感じさせる髪色と同じ眼光をカシムに向けながら、問う。

「祭りとは何のためにあると思う？」

冷やかな声が響く。

この声を聞いただけで凍り付いてしまうような音色。

周囲にいる人々は違和感を伴う音質を感じてデルブライトを見るが、デルブライトは気にする素振りはなく、この声を聞き慣れているカシムはそもそも違和感すら覚ええない。

座り込んだまま朱月を見上げるカシムは、騒ぐためだろ、と感情の籠らない声で答える。

「ああ、そうだろうな。俺は思うんだ。人は生来寂しがり屋なんじゃないだろうか、と。だから、群れを作る。祭りは群れるための口実だ、とな」

わかるか？とデルブライトはカシムを見る。覗き込む。

「それと同様に、お前も寂しがり屋なんだろうな。伴侶を求めて努力する様はまさにそれだ。哀れだな」

断定するかのような物言いに思うところもあるが、カシムは何となくデルブライトが何を言いたいのかはわかっていた。おそらく前日のことだ。魔王殺しの一件のことだろう、と。

デルブライトは魔王の死骸を求めて魔王殺しに参加していたのだ。魔王の血は大規模の魔術行使に耐え得る数少ない触媒だ。それを手に入れられなかったのだ。大層ご立腹だろう。

だが、カシムにだって言い分はある。

反論するかのようにはカシムは勢いよく口を開いたが やっぱり自信なさげに俯きながら言い訳をした。

「根に持ってるのかよ。勝手に逃がしたのは謝るけどよ。仕方ねえだろ？女が泣いてたんだぜ」

この言葉に感じ入ることなく、デルブライトは世の無常さを教える先達のように、カシムを見据え、諭すように弁を振るう。

「女の涙はこの世を上手く渡るための処世術だ。騙されるな。あいつらは平気で嘘をつくし、無意識に男を陥れる」

「何か嫌な思い出でもあるのか？」

「だからこそ、俺は伴侶など求めない。本当に素晴らしいのは悪魔っ娘だろう」

口上は止まらず、言葉を重ねるに連れ、デルブライトは高揚していくのか、何色にも染まっていけないかのような純白の肌は次第に紅潮し、身振り手振りで語り続ける。

「契約を結ぶ。俺の魂を捧げるかわりに生きている間は忠誠を誓わせる。そうすれば、どうだ？あいつらは契約を破らない。絶対に俺を裏切らない。だから、俺は悪魔っ娘と結ばれるためだけに魔道に身を堕としたんだろう」

「悪魔っ娘とやらを召喚するための儀式に使う触媒が手に入らなかったのは謝るから、ちくちくと口撃してくるのはやめてくれ。心底神経が磨り減る」

「フン、この程度のことでは済むと思うなよ、と言いたいが、今回だけは許してやる。お前の性格を知っていながら一人で行かせた俺にも責はある。とは言え、お前は女に甘すぎる。時には非情になれるよう己を律するべきだ」

できたら苦労しねえんだよ！とカシムは吐き捨てるかのように呟いた。

「そうか」

男になりきっていない少年二人に落ちる一瞬の間。

目を合わすことなく、何を見るでもなく、ぼんやりと見る。楽しそうに歌い、踊り、飲んで、食う人々を　ただ、眺めていた。

公園の中央の人だから巻き起こるのは絶叫。

舞い散る火花。天に向かって駆け抜ける鮮烈な火柱。祭りももう終わりに向け、盛り上げるために、とある魔術師が炎を天に向かって投げつけたのだ。

「明日は必ずやってくる。だから、今日という日を楽しもうぜ！」

甲高い声が響き渡り　残響し、火柱は空高くで爆発する。

天は朱月に照らされ、炎によって染められていく。

幻想的な空間。

男と女は手を取り合い、熱烈なキスをする。これが祭りの最後の儀式。

それを見てカシムは発狂しそうになった。

朱月は人を狂わせると言うが、一切関係なくカシムは暴れ出しそうだった。

仲睦まじいカップルを見るだけで殺意が沸く。拳句の果てで熱烈なキスシーン。狂気に染められそうになり、鬼気すらも発してしま

う。それはまさに嫉妬の心。

近くにいた小動物は逃げ出して、子供たちは泣き始める。

「落ち着け」

涼やかな声をかけられて、カシムは正気に戻った。

「やべエ、うっかり殺しちゃうところだった」

気づかぬうちに立ち上がり、【闘気】^{オーラ}が右手に収束していた。そのまま振り放てば自由公園には大きな亀裂が一つばかりできていたことであろう。

幸運にも被害は食い止められ、【闘気】^{オーラ}は虚空に霧散する。が、溜め込まれた鬱憤を晴らすことができなかつたカシムは欲求不満で、何度も両拳をぶつけている。硬い物がぶつかるときの音を出しながら、ぶつけている。

それを見てデルブライトはため息を吐く。仕方のない奴だ、と。そろそろ限界なんだろう、と察してやり、とある助言をしてやることにする。

「なあ、カシム。こんな話を知っているか？」

酷く不機嫌そうに、何だよ、とカシムは唸る。何でもいいからぶつ壊したい、と凶暴な形相で。

そんなものは全て無視して、デルブライトは語る。

「明日のことだ。明日、聖ブリュナーゲル城砦都市のシークレットイベントである【カイシネル神への捧げ】が開かれる。女好きだと言われるカイジネル神のために行われる」

「それがどうしたって言うんだよ」

唐突に何を言うのか、とカシムの脳内はクエスチョンマークで埋め尽くされる。

そう急くな、とデルブライトは言い、話を続ける。

「俺はそれを主催する機関である【ホットホットスプリングス】に護衛を依頼されていてな。この機関のことは知っているか？」

「女しか入ることを許されない聖域の守護機関だろ」

正しくは王家直属の 女王直属の特務機関。

王家の女しか利用できない場所を守るための組織だ。

本来は秘匿されていたのだが、だんだんと表に出てきており、通説では隠し通すことが無理になったのではないか、と言われている。

「ああ、それだけしか公表されていないからな。さて、何故男子禁制なのだと思う？」

だが、組織としての実務は未だに不明。

どこを守っているのか、何をしているのか、というのは一切わからない。

が、デルブライトは知っていた。

「温泉がある。至極とびきりの 極上のな。入浴するだけで十歳は若返るといわれるほどの効能があるらしい。その温泉の中でもとびきりの【ブルツシユリウムの秘湯】が明日にのみ開かれる」

ふざけた話を思っなかれ。事実だ。

【ホットホットスプリングス】はもともとはフェニックスの羽で満たされた温泉を守護するために女王が作ったものだ。

聖ブリュナーゲル城砦都市から遠く東にある場所で生まれたもの

だ。

だんだんと設立した女王から受け継がれていく中で変遷の道を辿り、今は優良温泉を守るだけの機関と成り下がった。

「言っておこう。ここに入るためには厳正な審査がある。つまりはだ。美人しか入れない。【ホットホットスプリングス】が認めた美女しか入れない」

裏話ではあるが、【ホットホットスプリングス】に在籍しているのは全員女性であり、女王の眼に適ったものだけが所属を許される。審査基準は不明である。

一つわかっていることは、その女性たちはとびきりの美女ばかりであり、皆目が肥えているので審美眼だけは高いということ。

つまりは 必見の価値ありということだ。

「それはどこにある？」

「カイジネルの神殿がある場所は知っているか？その奥深くにある。護衛や入浴者たちは神殿のゲートを使って最深部まで行けるが、それ以外の者が利用することなど許されない」

そんなことはカシムにとって問題はない。

仮にも魔王すら打ち倒す実力を持つ戦士なのだ。

並のトラップや魔獣では相手にならない。

故に 問題ない、と口にする。

だが、カシムにとって気になることがある。

「でもいいのか？お前は護衛なんだろう？」

「護衛だ。だから、侵入者は全て撃退する」

一切の迷いなき返答。

そうか、と呟きカシムはデルブライトの目を見た。
そうだ、と呟きデルブライトはカシムの目を見た。
フツ、とお互いに笑みを零す。

「ありがとよ。少しばかり自分を見失っていたみてエだ。久々にわかったぜ。俺の生き甲斐ってやつをよ」

「それは重畳」

カシムは立ち上がり、地べたで座っていたせいで汚れたケツの当たりを手ではたき、じゃあな、と言うなり背を向ける。

「ああ、またな」

祭りも終わり、人々はカシムのように自由公園から去っていく。酒のない樽は転がり、食い残しの残飯も捨て去られ、雑然としたゴミ置き場のような様相を呈している。死体のように眠りこける人もいれば、未だに乳繰り合うカップルもいる。

そんな中カシムを見送ったデルブライトは朱月を見上げながら、まだ残っていた酒を一気に呷ろうとするが、その行動は阻止されることになる。

横から背の低い少女が手を出して、デルブライトの腕を鷲掴みにしたのだ。

加重されていく握力により、貧弱なデルブライトの腕の骨は嫌な音を奏でながら軋んでいく。

「男らしくキメているところ悪いんだけど、いいかな？」

見知った顔だ、とデルブライトは思う。

所属するギルド【名誉なき栄光】のマスターであるミオだ。

いつもの柔らかい表情は消え去り、ヒクヒクと口元が痙攣してい

る。怒っているな、とデルブライトは推察する。

【酒を飲むことを妨害されるようなことをした覚えはないので、
筋力^{ブースト}狂化】を使い、筋力を増加させてミオの手を引き剥がす。

じろり、とミオはデルブライトを睨みつける。

「さつきから見えてただけどさ。一つ言いたいことがあるんだ。護衛を頼んだのは僕だよな？勝手に脚色してくれないでほしいな」

そんなこともあったな、とデルブライトはこぼす。

その淡々とした冷やかな声が余計に癪に障った。

「で、さ。なんで勝手にばらしてるのかな？厳正な審査に通って、のんびり入れるはずだったのに、なんでわざわざ強敵を生み出してるのかな？」

引き剥がされた手をスリスリと撫でながらミオは言う。ちょっと痛かったのだ。

すまん、とデルブライトは謝り、思いを伝えることにする。

「護衛っていうものは基本的に暇だからな。少しくらいのハプニングは必要だろう？」

そうなのだ。護衛というのは暇なのだ。

そんなことは聖ブリュナーゲル城皆都市の騎士たちを見ればわかる。

この都市はとにかく堅牢で、攻め込んでくる賊などおらず、敵对国家もほとんどない。故に、騎士たちは暇そつに巡回している。守るべき市民の前で、だ。

つまり、そんな怠惰な仕事をこなすくらいなら自分で難易度を上げよう、とデルブライトは建前だけでは考えたのである。

まるで俺は間違っていない、と断言するかのようなデルブライト。何故カシムと仲が良いのか、その理由をミオは垣間見た。要するに二人とも馬鹿だ。ため息しか出ない。

「君ってさ。見た目に似合わず本当にお祭り好きだよな　うちのギルドメンバーにはなんでまともな人がいないんだよう!」

思えばそう　戦士でトップクラスのカシムと魔術師でトップクラスのデルブライトを筆頭に、何気に優秀なギルドメンバーが多いにも関わらず、クレームの対応に日々駆け回る。

原因は間違いなくトップのちゃらんぽらんな性格のせいだろう、とミオは思う。

「勧誘をした人物の眼が腐っていたんだろう」

が、デルブライトは敵しかった。

本当のトップはミオである。お前のせいだ、と語っている。

ピクリ、と耳が尖って逆立った。怒ったぞ、というときのミオのポーズだ。

本来なら垂れ目のミオが眦を吊り上げて、デルブライトを睨む。自覚がないのは哀れだが、迫力は皆無だ。

「ねえ。それ僕に言ってるの?」

ドスの効いた声にしようと本人は努力しているが、ソプラノの声ではとてもではないがドスは効かない。

故に効果などなく、デルブライトは鼻で笑うばかり。そう聞こえたのならそうなのかもしれないな、とニヤリと口角を歪めながら言うばかり。

苛ついてミオは地団太を踏むが、ガキっばいな、と言われて深呼吸

吸をする。大人げなかった、冷静になれミオ！と心の中で己を叱咤。

「……ところで、本当にいいの？カシムが来たら凄いことになるよ？」

カシムは女の子に好きになってもらうためだけに魔王すら打ち倒したのだ。女の子の裸を見るためならどれほどの犠牲が巻き起こるのか。想像すらできない。どれほど本気になるのかなど、想像しなくもない。

あの馬鹿は 考えただけで頭痛がする。

頭を押さえるミオを見て、デルブライトは言う。

「動き出したあいつを止めることは誰にもできん」

「止める気なんてないくせに」

「ああ、止める気なんてない」

こつもはつきりと言われるとミオは苦笑いするしかない。

人選間違ったなあ、と思うしかない。

着ているセーターの袖で流れ出る涙を拭うしかない。

僕はなんでこんなにも部下に恵まれない と。

「だって、そのほうが面白そうだろう？」

同意を求めるようにデルブライトはミオに言うが、うっせえ！

と罵る声とともに、デルブライトの頬に小さな拳が突き刺さる。

一発でノックアウト。

祭りも終わり、まばらになった人々は、いきなり男をト突き飛ばす少女のほうに奇異の視線を向ける。

「こつち見んなあ！」

ミオもいろいろと限界だった。

何度かデルブライトの腹を蹴り飛ばし、一息吐いて、デルブライトの飲みかけだった酒を飲み干して帰路に着く。
残るのは哀れな魔術師ただ一人。

1 - 3 ・旅立ち

3 .

【ブルツシユリウムの秘湯】の情報を知った翌日の早朝。小鳥の囁りがまだ眠りにつく街の中をこだまする。その声に引き摺られるようにカシムは起きた。

安上がりの木造りのベッドの上に街で一番安く売っていた布団をかけているだけの簡素な寝台ではちくりとカシムは目を開ける。腹筋を使つて一気に起きて、グツと伸びをする。寝起きは良いらしい。すぐ隣にある木窓を全開にし、日光を全身に浴びる。たいへん天気が良く、燦々と降り注ぐ太陽は今日もご機嫌だ。それだけでカシムも機嫌が良くなるというもの。

「よし」

呟いてそのまま外で出る。前に服を着る。

カシムは寝るとき基本的に全裸だ。裸族ともいう。独りで住んでいるので別段誰かに迷惑をかけるということもないのだが、裸のまま井戸水で顔を洗っているのをミオに見られ、股間を蹴り上げられて以来、部屋以外ではパンツを履くようにしている。

パンツを履くなり外へ出る。ガチャリ、とドアノブを開ける音が隣から聞こえた。のそりと出てきたのはデルブライトだった。

肩ほどまであるキメ細やかな朱色の髪はボサボサで、眠たいのが丸わがりの半開きの眼だ。着ている服は市販でよく使われている麻で作られたパジャマだ。

「おはよう」

とカシムが手をあげて言うと、よう、とだけデルブライトは反応する。意識はあるのか、のそりのそりと危なげに階段を伝って一階まで降りる。大丈夫かよ、と少しカシムは心配するが、こけるようなこともなく降り切った。

階段の下は昨夜ほぼ宴会場と化していたギルドのエントランスだ。もう綺麗になつている。あれだけ暴れたのに　とカシムは思うが、おそらくミオがせつせと掃除したのだろう、とあたりをつける。

あれはやりすぎたかなあ、などとカシムは反省する。

その間にもデルブライトは幽鬼のような足取りでギルドの外に出て、井戸の前でぴたりと止まる。そのまま井戸水を吊るされた桶で汲み上げて一気に顔を突っ込んだ。

「きつくううっ！」

などと雄叫びを上げている。

カシムも追随するかのように後を追い、顔を桶にぶち込んだ。

冷やりとした井戸水が顔面に襲いかかってきて、もともとなかったはずの眠気が吹っ飛んだ。そのあと一気に身体に水をぶちまけて、全身を震わせて水滴を吹き飛ばす。

「犬みたいだな」

水飛沫を豪快に喰らって全身水浸しになったデルブライトがしかめっ面で言う。鬱陶しい、と言わんばかりの表情でパジャマを脱いで絞る。

「ところで、カシム」

「何だ？」

「昨日は酔った勢いであんなことを言ってしまったが　本当に行くのか？」

昨日のこと 【ブルツシユリウムの秘湯】のことが、とカシムは察する。行くかどうかなど既に結論が出ている。迷うはずもなく、当然だろ、と一言。

そうか、と小さくこぼすようにデルブライトは絞られてくしゃくしゃになったパジャマを見た。

「ぶっちゃけた話、最低な事をしようとしているのはわかっている。法を犯すことも自覚している。それでも 俺は諦めがつかねえんだ。彼女が欲しい、なんて思ってたこともある。けどよ それは報われねえ夢なんだよ……」

報われない事なのだろうか、とデルブライトは思考する。まあコイツにとってはそうなんだろうな、と決着を見る。至極どうでもいいことなので思考を破棄したのだ。

「だから、俺はせめて見たいんだ。官能小説で赤裸々に描かれる女性の神秘を俺の裸眼で確かめたいんだ。全身あますことなく、な」

至極真面目な顔でカシムは言う。デルブライトにはどうすることもできなかつた。酔った勢いで言った手前、自分の責任もあるのかもしれないな、と少しばかり罪悪感もある。

「それによ。楽しみにしてるんだぜ？魔王狩りも結局退屈だった。全力で取り組む必要なんてなかつた。血で血を洗うような激闘を俺は久しく味わってねえんだ」

デルブライトにその気持ちはわからなかつた。

圧倒的な戦力で勝つほうが良いに決まっているし、ギリギリの勝負などは経験しないほうがいいに決まっている。メリットがないか

らだ。

しかし、どういふことだろうか。目の前にいるカシムは違つらしい。歯を剥き出しにして好戦的に嗤うカシムは異なるらしい。

「だがよお、今回は敵にお前がいるじゃねエか」

戦いたいのか、とデルブライトは思う。

デルブライトは少しばかり体温が熱くなったような気がした。いつの間にやら拳を握りしめ、握りしめられた掌の中は汗ばんでいた。心の中には何か熱いものが脈動する。

これは

「血が滾るってモンだろ？」

カシムは言う。

わからない、というのがデルブライトの正直な気持ちだ。だが、興奮しているという事実もある。

俯き、手を見つめっていると、カシムは立ち上がった。

デルブライトよりも少し高い身長で、カシムは見下ろしていた。

そして、拳を突き出している。

そうか、とデルブライトは呟き、拳を突き出す。

「どつちが上か教えてやる。全力で叩き潰してなア……」

挑戦的な言葉。

カシムとデルブライトは今仲間となっているが、幼い時分は敵だった。

そのときにも同じようなことをデルブライトは言われていたことをデルブライトは思い出す。笑みがこぼれた。

「いいな。それは実に良い。自分の力を客観的に分析できない獣に
躰をする絶好の機会だ」

これもデルブライトが昔に言った台詞だ。

捻りもなく、そのままの流用。ただそれだけのことなのに、カシ
ムもニマリと笑う。

「言うねエ?」

「言わせてもらおう」

笑い声とともにカ一杯拳同士をぶつけ合い、離れる。

今日も太陽はご機嫌で、カシムとデルブライトもご機嫌で、冒険
を始めるにはとても良い日だ。

「エンチャン【武装】」

カシムがそう唱えると、何もなかったところにカシムの装備が現
れる。装備を出し入れするための簡単なスペル。

呼び出したものは超大な大剣と魔獣の毛皮で作られた胸当てとパ
ンツ。その下に着る武闘着だ。それらをカシムは着込んでいく。

「俺は先に行くぜ」

言うなりカシムはデルブライトに背を向けて歩きだした。

「ああ、先に行かせて悪いが、待つのは俺だ。途中でくたばるんじ
ゃないぞ?」

背にかかる言葉を聞くまでは歩いていたのだが、デルブライトの
言葉で立ち止まり、苦笑する。

「ク、ハハハ、本気で言ってるのか？なア、本気で俺がくたばると思ってるのか？」

「そんなことはない。こういう雰囲気だと、英雄譚ではこういう台詞が出てくるだろう。だから、言ってみただ」

ここでカシムは考える。確かにそうかもしれないな、と同意しつつ、考える。

「英雄譚ねエ 題名を付けるとしたらどうなるんだろうな？」

「ふむ、考えておこう」

話は終わり、視線が交差する。

「あはよ」

「またな」

こうして独りの冒険者は旅立った。

行く先は秘湯。美女たち蔓延る夢のような楽園。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920j/>

“え”から始まる物語 改稿

2010年10月9日05時40分発行